**受難節第６主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年３月24日**

**「鶏鳴暁を告げる」**

**創世記３章9～13節**

 **3:9 主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」**

 **3:10 彼は答えた。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」**

 **3:11 神は言われた。「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなと命じた木から食べたのか。」**

 **3:12 アダムは答えた。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」**

 **3:13 主なる神は女に向かって言われた。「何ということをしたのか。」女は答えた。「蛇がだましたので、食べてしまいました。」**

**マタイによる福音書26章69～75節**

**26:69 ペトロは外にいて中庭に座っていた。そこへ一人の女中が近寄って来て、「あなたもガリラヤのイエスと一緒にいた」と言った。**

 **26:70 ペトロは皆の前でそれを打ち消して、「何のことを言っているのか、わたしには分からない」と言った。**

 **26:71 ペトロが門の方に行くと、ほかの女中が彼に目を留め、居合わせた人々に、「この人はナザレのイエスと一緒にいました」と言った。**

 **26:72 そこで、ペトロは再び、「そんな人は知らない」と誓って打ち消した。**

 **26:73 しばらくして、そこにいた人々が近寄って来てペトロに言った。「確かに、お前もあの連中の仲間だ。言葉遣いでそれが分かる。」**

 **26:74 そのとき、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、「そんな人は知らない」と誓い始めた。するとすぐ、鶏が鳴いた。**

 **26:75 ペトロは、「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われたイエスの言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた。**

**「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」この言葉はいわゆる最後の晩餐の時にイエス様がペトロに向かって語られた言葉です。これから夜が更けていく時、イエス様が「鶏が鳴く前に」、今日の説教題で言いますならば「鶏鳴暁を告げる」その前にペトロがイエス様のことを裏切ることを予告されました。この言葉を聞いたペトロは「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」と強く反論しました。ペトロだけではありません。他の弟子たちも皆、同じように言ったことが35節に記されてあります。ペトロや他の弟子たちはよほど自信があったのでしょう。イエス様にどんなことがってもどこまでも自分の力で従って行けると確信していたのです。**

**しかし、その驕りともいえる自信はイエス様がユダと時の権力者たちに逮捕された時にもろくも崩れ去ったのです。56節には「このとき、弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった」と記されてあります。もちろんペトロもその中の一人です。あれだけ威勢よく言っていた、その舌の根も乾かない内に時間にしてわずか数時間でイエス様を裏切ったのです。それでもペトロはイエス様のことが気になっていました。イエス様が大祭司カイアファのところに連れて行かれてこれから不当な裁判が始まる時ペトロは戻ってきました。**

**「ペトロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで行き、事の成り行きを見ようと、中に入って、下役たちと一緒に座っていた。」と58節に記されています。自分の身の可愛さにイエス様を捨てて逃げてしまったペトロですが、それでも自分なりに遠く離れてでもイエス様に従っているつもりなのでしょう。誰にも気づかれないようにこっそりと大祭司の家の中庭に忍び込み、イエス様がどうなるのかを遠巻きに見ていたのです。時は真夜中です。暗闇の中で「これなら誰にも気づかれない」と遠くから観察をしていたのです。ルカによる福音書では大勢の人に交じって一緒になってたき火にあたっていたことが記されています。暗闇の中パチパチと音を立てながら自分の顔を照らすたき火の炎を見てペトロはいったい何を思っていたでしょうか。**

**そんな時です。一人の女中がペトロに近寄って来て「あなたもガリラヤのイエスと一緒にいた」と言いました。突然のことにペトロは慌てたでしょう。「何を言っているのかわからない」ととっさうそをついてその場から逃げました。**

**ペトロは門のところまで逃げました。すると他の女中が彼に目を留めて他の人に「この人はナザレのイエスと一緒にいました。」と告げ口したのです。ペトロは「そんな人は知らない」と誓いをして女中の言葉を打ち消したのです。**

**しかし、ペトロが「そんな人は知らない」と言ったことがあだになりました。ガリラヤ訛りという表現があるのですが、ガリラヤ出身のペトロはつい訛りが出たのです。（関西弁で）「そんな人知らんわぁ」みたいな感じです。その訛りを聞いた人は「確かに、お前もあの連中の仲間だ。言葉遣いでそれがわかる」と言いました。3度も問い詰められたペトロは呪いの言葉と誓いの言葉で「そんな人は知らない」と強く打ち消したのです。するとすぐに鶏が鳴きました。**

**鶏が鳴くのは夜明けの2時間くらい前と言われています。まだ暗い時間帯です。そんな暗い中で「コケコッコ」とけたたましく鳴くその鳴き声が響いたのです。ペトロ以外の町の人が鶏の鳴き声を聞いたら「もう朝が近いな」と思ったでしょう。**

**諏訪市では夕方の5時になるとチャイムで「夕焼け小焼け」が流れます。「夕焼け小焼けで日が暮れて」の童謡です。諏訪市のチャイムでは最後の「カラスと一緒に帰りましょ」の部分が2回繰り返されて流れます。私はそのチャイムを聞くといつも「ああ、もう5時か」と思うと同時に「カラスと一緒に帰りましょ」が2回繰り返されるので、子どもの頃時間を忘れて近所の友達と外で遊んでいて、母から「はよ帰ってきいや」とよく言われていたのを思い出すと共に、故郷の夕焼けの風景を思い出して何となくしみじみとした気持ちになります。**

**ここでペトロが鶏の鳴き声を聞いて故郷の夕焼けの光景を思い出したのではありません。**

**ペトロが思い出したのはイエス様の言葉です。夜が更ける前の食事の時にイエス様に言われた言葉を思い出したのです。「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」このイエス様の言葉を思い出してペトロは外に出て激しく泣いたのです。**

**「激しく泣いた」の「泣いた」はもともとの言葉ではしみじみと泣くとか涙がほろりとこぼれるといったような控えめな泣き方を現す言葉ではありません。この「泣いた」の言葉は「声を出して泣く」という泣き方を現すのです。わんわんと声に出して泣くのです。号泣するのです。そこに「激しく」ですから、大号泣です。まだ夜も明けきらぬ大祭司の家の門の外、お祭りの期間中ですし家の中では不当な裁判が行われていましたからそんな時間帯でも人の通りは結構あったでしょう。そんな中で大の大人が人目もはばからずに大号泣するのです。大きな声でまるで叫ぶようにエルサレムの町中に響き渡るように大号泣するのです。「夕焼け小焼け」のチャイムが町中に響き渡るがごとく、ペトロの泣き叫ぶ声は町中に響いたのではないでしょうか。**

**なぜペトロがそこまで大号泣するのでしょうか。それにはよっぽどの理由があるのでしょう。**

**ペトロは「私はその人を知っている。わたしの先生だ」と言えば捕まえられて、もしかしたら殺されるかもしれない、そうなっては困るから自分の身の可愛さに「知らない」と嘘を言ったのです。あんなに大見栄を切っていたのに裏切ってしまった、自らの弱さを思い知らされたのでしょう。そして、自らの罪というものを思い知らされたのでしょう。自分はユダとなんら変わらない、裏切り者だ、自らの姿を思うとふがいないやるせない、悔しいそんな感情が込み上げてきたのでしょう。それがペトロの涙となって溢れたのでしょう。**

**でも、そのようないわば自責の念で町中に響き渡るがごとく大号泣をするでしょうか。そこまで大泣きをするかというと疑問です。せいぜいさめざめと泣く程度だと思います。**

**最初ペトロは大祭司の中庭でたき火にあたっていたところを女中に指摘をされました。「何のことを言っているのかわからない」と答えて門の方に行きました。恐らく逃げたのでしょう。そこでさらに声を掛けられて問い詰められて「そんな人は知らない」と答えたのです。これってよく考えたら不思議なのです。最初に問い詰められた時に「何を言っているのかわからない」と答えたのは良いとしても、そこから逃げたとしても、なぜもっと一目散に逃げなかったのでしょう。二回目の問い詰めを無視して走って逃げ去っても良かったはずです。それなのに、門の所で問われてそこで逃げるのをやめているのです。踏みとどまっているのです。さらに問い詰められるのは分かっているだろうに、門の外に一目散に逃げて行かないで踏みとどまったのです。その結果3度も問い詰められて知らないと否定して鶏が鳴いてイエス様の言葉を思い出したのです。**

**最初から一目散に逃げていたら、鶏の声も聞こえないくらいに一生懸命に走り去っていたら、イエス様の言葉を思い出すこともなかったでしょう。**

**ペトロを踏みとどまらせたもの、それがイエス様の愛なのではないかと思います。最後の晩餐の時にこれからご自分を裏切ろうとしているペトロに「今夜、鶏が鳴く前に」と言われますが、「そんな私を裏切るようなあなたは弟子としてふさわしくない、弟子失格だ、今からあなたと私は弟子でも友でもなんでもない。私はあなたを知らない」とイエス様はペトロに言われませんでした。裏切ることは十二分にわかっているのに、それでも愛して下さるのです。**

**並行するルカによる福音書22：32では「しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」とまで言われるのです。「これから私を裏切るあなたのために信仰がなくならないように祈る。祈り続ける。立ち直ったら兄弟たちを力づけてやりなさい」これがこれから自分を裏切る人に向かって言う言葉でしょうか。こんな自分を愛して下さっている。こんな裏切り者の自分のために祈って下さっている。立ち直れるかどうかわからないのに、立ち直ったら兄弟たちを力づけてやりなさいとまで言って下さる。そのイエス様の深い愛に気づかされたのです。鶏がけたたましく鳴く、その鳴き声を聞いた時に、ペトロは自分の身の可愛さにすっかり忘れていたイエス様の深い愛に気づかされたのです。だからこそ、ペトロは大号泣したのです。自分の弱さに気づかされ罪深さに気づかされ、こんな自分でも愛して下さっているイエス様の大きな大きな愛に気づかされた、そういった色んな思いが爆発したからこそペトロは人目もはばからずに大号泣したのです。**

**これは言い伝えに過ぎないのですが、その後立ち直り聖霊を受けてイエス様の十字架と復活を愛を語るようになったペトロはいつも胸に1枚の布を入れていたそうです。そしてしょっちゅうあふれ出る涙をその布でぬぐっていたそうです。今私たちは使徒言行録を読み進めています。そこでのペトロは聖霊に満たされて力強くイエス様の十字架と復活の福音をイエス様の愛を語っています。もしその言い伝えが本当なら力強く語るその時も、ペトロはイエス様の愛の深さを思い出しては胸から布を取り出してあふれ出る涙をぬぐっていたのでしょう。こんな弱い私をイエス様は愛して下さり、こんな裏切り者の罪深い私のためにイエス様は十字架に掛かって死んでくださったことを声を詰まらせながら時には嗚咽しながらあふれ出る涙を一枚の布ではぬぐい切れないほどに大粒の涙を流して喜びを語っていたのでしょう。**

**私たちの教会のある方はお会いするたびに、あるいは電話でお話しするたびに「私みたいなものが神様に愛されて生かされていることに感謝しかありません」といつもおっしゃられています。「私のような罪深い者が」「こんな私のためにイエス様は十字架に掛かってくださった」このことに私たちが気づかされた時に私たちはただただ感謝をして「神様ありがとうございます。イエス様ありがとうございます。」と言うことしかできないのです。私たちがいただいている大きな愛を、私たちそれぞれができる小さな愛の業で周りの人々に証しをしていくのです。そこに私たちの喜びがあるのです。**